

白朗著

戦争に対する厳粛な判決

1953年1月

ウィーン、この古い音楽の都よ。傷は未だ完治には至らず、驚愕から安寧を回復することができないでいる。ウィーンは、本来の美しさの中に、生への焦りと不安を隠し、まだらの傷跡が透けている。一方、強盗の掠奪・殺人は、苦難の朝鮮半島ではまだ続いている。罪深い爆弾、細菌戦、ナバーム弾、それらすべてが、未来の命運を示す。長年、朝鮮には自由がなかった。独立自由の権利はなかった。ついさっき玄関から悪い犬を追い出したところなのに、また、窓から凶暴な狼が侵入して、もう7年間居座って出ていこうとしない。その命運を左右するのは、朝鮮で人を殺し、火を放つアメリカ狼の野心家どもだ。そしてウィーンでは、アメリカによる奴隷労働の下、戦争の暗雲が空の半分を閉ざしてしまった。だから人々は、焦りと不安にさいなまれているのではないか。

しかし、誇らしいことに、12月のウィーンは、栄光の都市になり、地球の中心になった。勇敢にも平和の水門を開け、その心臓に向かって流れる幾千万筋の暖流、希望の白波を受け入れたのだ。ウィーンは新たに、光り輝く生命を取り戻した。厳しい冬がなんだというのか。逆巻く暖流が告げている。人類の春が、足音を立ててやってきたよと。

12月、天も地も凍てつく寒さであるが、氷雪は高山や海洋を閉ざさず、すべての道は、オーストリアの心臓に向かう。アジアから、アフリカから、アメリカから…地球上の最果ての地から、こんなに多くの平和の大軍がやってきて、人民の大きな旗を高く掲げて、ウィーンの朝霧を突き抜け、人類の素朴な真理を歌いだす。ウィーンの平和を愛する男女が、一番美しい花をもって、一番真摯な熱情を以て、友人たちを歓迎する。彼らはデモ行進で、この正義の行動を支持する。その連綿と数里も続く松明が、ウィーンの曇り空を明るく照らす。ほら見てごらん。あそこにもここにも、お父さんに肩車してもらって平和を呼びかける子どもたちの小さな手、手、手がある。ほら見てごらん。おばあさんの目の中に光る涙…すべてがひとつの真理を説明している。—自由がほしい、平和がほしいという真理。このような真理が、人々をここに引き寄せた。共通の責任と願望が、人々をここに惹きつけた。これは人類の囑託であり、慈母の願いだ。善と愛、幸福と理想が、世界中の人を団結させ呼び寄せた。もともと知らない者どうし。政治見解や宗教もちがう。しかし皆、初対面なのに、旧友に会ったかのように喜んだ。親しい握手ぐらいではこの感情を表しきれず、キスして、笑って、跳んで。ウィーンの音楽堂は調和と友愛の大家庭のようになった。

「長い間離れていた家族と再会したような気持ちになりました。わがままな子どもが家の中で放火しているのです。私たちは一堂に会し家族会議を開いて、どうやってこの子を躰けるか研究しなくては…」(エジプト代表の話)

いやちがう。我々が友愛的な雰囲気だから家庭の集まりのような気になるけれど、躰けなければならないのは、単なる「わがままな子ども」ではない。人間性を喪失した一匹の

野獣だ。平和の大いなる敵だ。主客転倒の悪い習性を持ち、血なまぐさい両手で、人類の尊厳を掃き捨てて、世界に深刻な災難と恥辱を被らせた。我々が団結して、燎原の大火を消し止めんと全力を尽くすとき、やつは懸命に分裂を図る。やつは手下、弟子、孫弟子を唆して、様々な陰謀を張り巡らせ、公然とまた秘密裏にこの集会を阻止しようとする。各種の流言飛語を飛ばし、兄弟間の友誼を裂き、神聖な平和の事業をひっくり返そうと企んでいる。やつを家族の一員と認めることができるのか？

しかし、すべての陰謀や破壊行為は徒勞に終わるだけなのだ。平和の勢力は団結し、鉄の長城をなしている。血まみれの両手が世界をゆり動かすことができるだろうか？ 恫喝と暴力によって、愛と平和の意思を斬ることはできない。牢獄や手かせ足かせで、自由を求める心を縛ることはできない。結局は、アメリカの代表も来たし、イギリスの代表も来た。日本、イタリアの代表みんながやって来た。東西ドイツは統一代表団を組織して来た。タイ国、フィリピン、アイスランド…それからラテンアメリカ、アフリカ、ほとんどすべての植民地の代表がみな、嚴重な包囲を突破してやって来た。チュニジアの代表は、10人の戦友が監禁され脅かされている中、たったひとりでウイーンにたどり着いた。彼はひとりだけれど、ちっとも孤独ではない。その孤高の雄姿が会場に現れると、とびきり多くの共感と喝采を浴びた。

来られる者はみな、万難を排してやって来た。実際、来られない人も、工夫を凝らし、彼らの声、心の手を携えてきた。「思想はビザなしで旅行できるのです」(キュリーの言葉)。平和を求める署名の束、束、束。そして数多くの大会を祝う祝電が、まるで鳩の群のように飛びこんできた。ギリシアのフス監獄の400人の死刑を宣告された平和の戦士、彼らもまた、大会に希望と自信あふれる祝電を送ってきた。

偉大な世界人民平和大会で、ギリシア戦士の椅子が空席などとはありえない。たとえ敵の壁が我々の行く手を阻んでも、我々はすでに白鳩を手に入れているのだ。白鳩を大会へ向けて放ち、そして、大会の空から全世界へと飛び立たせよう。白鳩があなたがたの便りを携えて戻ってくるのを我々は待っている。平和の戦士が必勝の旗の下、幾千幾万の熱い心で団結する。我々の隊列、我々の力はどれほど壮大だろうか。偉大な勝利は近づいている…祖国の傷と人民の災難を脳裏に焼き付け、迷うことなく、偉大な民族英雄が通った道をたどるのだ。忌まわしい戦争よ。勝利は人民に！世界平和万歳！

これは命がけの呼びかけであり、フチークの精神である。たとえ死を免れないとしても、その声は永遠に人々の間に響き渡る。暴力など、一銭の価値もない。(フチーク夫人も来ていて、フチークの話を引用し、「みなさん、私はあなた方を愛している者です。どうかご用心くださいね。」と呼びかけた。)

会場では、嬉しいことに、西ドイツ代表のリリー・ヴェヒターに会った。私たちは古い友人だ。朝鮮で共に戦ったかけがえのない日々、あの宝石のような友情を思い出すと、本当に、言葉にならない熱い思いがこみあげる。あれから一年半、彼女ははずいぶん老けたようだ。老けないはずがないだろう。朝鮮から西ドイツに帰るや、たちどころに監禁され、取り調べられ、迫害され痛めつけられたのだから。それは彼女が、朝鮮でアメリカ軍が行った暴行の真実を洗いざらいすべて人民に話したからである。しかし彼女は今も、平和の

ために、わが身を顧みず奮闘している。85 か国 2000 人近い代表の中、彼女のような境遇の人は少なくない。一年余り監獄にいて自由をえたばかりのブラジル女性代表ブランコもそのひとり。

人々は、平和のために、様々な奮闘をしている。奮闘なしに、勝利がやってくるはずはないではないか。

議長席から、ブラジル代表の老人が心臓発作で急逝したという訃報が発表された時、どれほど多くの人が涙を流したのか。彼を知っていた人は、実際そんなにはいなかったが、涙を流した人はこんなにも多かったのだ。人々はその無私の精神に感動した。これは平和の友情だ。彼はもう高齢だったので、苦勞しながら大会開幕前にウイーンにやっとたどり着き、精根尽き果てた。人から休んだほうがよいと勧められたのに、押して開幕式に出席し、そして帰らぬ人となった。彼は大会に対して沈痛な思い出を残しただけでなく、深い勇気を与えた。人々は平和のために死んだブラジルの老人を思うと、どんな疲れも吹き飛んだ。

信頼は勇気であり、平和の力を保証する。お互いに信頼し合ってこそ初めて友愛の情が起こり理解し合える。朝鮮人とアメリカ人であろうが、ベトナム人とフランス人であろうが、マレーシア人とイギリス人であろうが、心から打ち解け抱擁することができる。これは、人民は永遠に友愛で結ばれているからではないだろうか。この大ホールの中では、憎しみは存在しない。猜疑心でさえ消えうせる。

ドイツの神学校のピンダー女史は、「マルクス主義は人類に尊厳を与え、レーニン、スターリンが発展させ、全世界で勝利を得たのです。ですからキリスト教は“共産党宣言”に反対すべきではないし、むしろ、それを研究しなければならないのです」と言った。

フランス資本主義階級頹廃主義作家サルトルとアラゴンの思想立場を一致させることは不可能だが、サルトルは、最高の権威をもつ人民中国を連合国が尊重しないことに対し、悲憤慷慨していた。彼はこの2つの制度の平和共存が可能だと信じていた。だから、彼は、ソ連や各人民民主国家との友好的なつきあいを主張し、彼は「我々は屈辱の平和はいらない。奴隷の平和はいらない」と高らかに呼びかけた。

連合国は提案によって朝鮮問題決議案を強行採決した。しかしインドの政権党一国民会議派の議員キッチリ博士は、インド人民の主張をしっかりと堅持し、アジア及び太平洋地域の平和会議で「すぐに朝鮮への軍事行動を停止し、国際法に基づいて戦争捕虜を全員返しなさい」と主張した。中印代表合同の歓迎会でも、キッチリ博士の話は人の心を動かし、「インド人民は永遠に、アジア人にアジア人を攻撃させるようなことはさせない」と彼は語った。

人々は、平和の力を、このように強く信じている。天の神の権威だけを信じている人でも、確実に信じている。人民は、平和的な手段で自己解放できる力をもっている。平和の力は、罪深い戦争を一掃することができる。だからイギリスのキリスト教牧師は平和宣言を起草し、あらゆる宗教の信者に呼びかけて署名してもらった。先を争って署名する場面も、この大会で最も熱い場面のひとつである。

中国は、アメリカ政府による細菌戦の蛮行の展示をした。それを見て、人類がこれほどまでに墮落するものだろうかと初めは信じていなかった人も、細菌戦の武器は、絶対にアメリカ軍が使用したのだと確信するようになった。そのため、アメリカの戦犯は世界中の

世論の支持を完全に失うこととなった。

侮辱され被害を受けたことを告発すれば、それが最も有力な抗議となる。戦争の災禍にあえぐ国々に先立ち、まずは植民地のアピールを聞こうではないか。

コロンビアの農民リーダーは監禁されて2年後、1952年11月9日殺された。それは、彼がワルシャワの平和大会に参加したというだけの理由だった。6年間に、10万人の愛国者が殺された。30万人が放逐され祖国を離れた。平和産業は戦争産業に変わった。外来の生活の仕方を、この国の人々はむりやり受け入れさせられた…

アルジェリアは、フランスとの戦争中、(フランスの)「英雄」の統治下、170万の子どもたちが路頭に迷った。彼らには自分の文化がなく、95%の民衆は読み書きができない。12万人中医者はたったひとり。徴兵はすでにイスラム教徒にも及んでいる…

パラグアイで建てられたばかりの生物学院が、アメリカ軍に接収され兵営になった。ある青年のカップルが結婚して警察に報告しなかったら、監獄に入れられた…

エジプトは独立とは名ばかりで、実際は完全武装のイギリス軍に占領されていた。「エジプトは戦略の要地だから、我々を盾にして、敵を防ぐのだ。誰が敵なのか、わかったもんじゃない」

フィリピンは既にアメリカにとっては安い原料の供給者になっていた。7千の島のうち、人民のものはひとつもない。アメリカがフィリピンの独立を宣言して以来、アメリカは、この所謂独立国家に23の軍事基地を建設して来た。

それからシリア、チリ、スーダン、南アフリカ…多くの人が血の涙を流し訴えた。それはまるで、いじめを受けた子どもが母親に会って心の底から切々と苦しみを訴えているようだった。しかし、彼らは弱小だといっても、侵略されるに任せる子羊ではない。植民者は至る所で抵抗に遭遇した。平和の力もまた、このような抵抗の中、日増しに大きくなってきた。

これがウイーンに国家の代表が集まった理由であり、ウイーンに来ることができた理由なのだ。

ギリシアの代表は、「ギリシアの2グループの兵士がアメリカ軍砲兵参謀部を襲撃し、アメリカ軍兵士50名あまりを殺傷した」戦いについて話した。これはちっぽけな事例ではあるが、人民は永遠に不屈であるということ、敵に対して生き生きと伝えたのだ。

戦争は母親に苦しみを与え涙を流させた。母親には人類を存続させる責任があり、非人道的暴行を許すことができない。ほら、朝鮮の母親金英秀の目に澄んだ涙が浮かんでいる。

「ご存知ですか。ここで会議を開いている今このとき、あなた方の子どもたちが私たちの子どもたちを殺しているのです！あなた方は、なぜ大切に育てた子どもを朝鮮に送って強盗させているのですか？あなた方はなぜ、愛情をウォール街の米ドルに換えて、自分の夫を悪魔に変えて死地に送るのですか？夫と息子の犯した罪によって、大勢の朝鮮の女性たちが寡婦になっているのですよ！愛する夫と息子の顔に、永遠に消えることのない恥ずべき死神の烙印が押されるのをがまんできるのですか？」

席上にいたアメリカの母親、イギリスの母親、カナダの母親…数多くの母親の目にも、澄んだ涙がきらりと光った。近くの席に座っていたイギリス人のおばあさんは、声を詰まらせ泣いていた。彼女らの涙は、がまんできない、絶対にがまんできないという答えだと言ってよいだろう。

「幸福と自由を愛するのなら、すぐにあなたの夫と子どもを呼び戻して、朝鮮女性のよ
うな災難を受けないようにしてください」

正当でかつ手厳しい指摘・訴えにより、ホール全体のすすり泣きが融けあった。作家の
魂は深く揺さぶられた。アラゴンは発言にあたって感情が高ぶり平静ではいられず

「討論の中で、朝鮮代表の涙をいつも思い出してください。心からのお願いです。この
涙を見て、まだ反対意見って、ありえるでしょうか？」

と発言した。

その通り。心は一つ。平和に関する問題では、永遠に一致するのだ。アメリカ代表が荘
厳かつ沈痛にみなに告げた。「アメリカ人はもう目覚めましたよ！シンプルなアピールの支
持を決めました。それは『戦争の幕を下ろして、平和の幕を開こう。銃砲を置いて発言す
れば、交渉は簡単になる。停戦だ。戦いをやめて、人々の要望を聞いてみよう。耳を覆っ
てはいけない。聞いてみよう。人々は、一方で我々に戦いを挑み、一方で友情の手を差し
出す。戦いを挑むのなら、我々に戦争を止める力があるかどうか、ちょっと見るべきだ』
というものです」。彼は、「人民は、自分たちの政府を変える権利がある」と言い切った。

アメリカの女性たちが、千本もの美しい平和の花を準備し、各国の姉妹に渡した。彼女
らは、花をもって、彼らが渴望してやまない平和を、千言万語にとってかえた。アメリカ
の代表のうち三分の二は、平和を愛する女性なのだ。

兄弟のような友好的な会議が平和の礎を打ち立てる。満場一致で採択されても、なおも
疑問が残るかもしれない。だが、こんな会議は後にも先にもないことは確かである。平和
の言葉は、すでに人類がめざす手本となり、世界中で最も響き渡っている。「アメリカが『世
界を統治しようとする責任』があるととしても、世界の人民も、奴隷にはなりえないと決意
する責任がある」エレンブルグは、大会に対して、非常に正しい予言をした。彼の発言は、
最も偉大で最も美しい詩であった。才能のある詩人が、彼のために賛歌を書くはずだ。

この大会に参加すれば、民主、団結の雰囲気を生涯忘れられない。あのような熱い友好
的な情景を忘れられない。コルネイスクの発言（取り上げてみる必要がある。彼の発言は
鋭利な匕首のようだ。敵の心臓を一突きにする）の後、宋慶齡の発言の後、エレンブルグ、
郭沫若、朝鮮代表の発言の後に、聞いてごらん、天地を揺るがす歓喜の声と拍手が沸き起
こった。これで、人民の心がどこに向いているか、だれを熱愛しているかがわかる。全員
の投票結果、満場一致で2件のアピール文が採択された。場内は紙吹雪が舞い、スカーフ
がひらひらと飛びかった。みんなが挙手し、跳んで、歌って、歓喜の声があがった。…百
本のペンがあっても、このようなものすごい歓喜の様子を描ききれないだろう。私がくど
くどと賛辞を繰り返すより、西ドイツの老人ワルシャの言葉をあげておこう。

「30年前、私はこの大ホールでベートーベンの交響曲を聴いたことがあります。今日、
この力強いベートーベンの合唱に深く感動しないとしたら、その人は人の心がない人です」

ベートーベンの音楽は、すべて、崇高な願いをたたえる歌である。私たちは戦争を憎み、
平和を宣揚し、生活の喜びを賛美しよう。私たちにお互い尊重し合い、信頼し合って、永
遠の友愛を築こうではないか。平和は必ず戦争に勝つ。生命は必ず死に勝つ。平和は太陽
で、太陽は永遠に光を発し続けるのだ。

(了)